

「オネエ所長の調査ファイル」 # 1 3

山崎浩治

1

「あたしの理想はオードリーなの」

「お笑いのオードリーですか？　そういや所長は春日に似てますね」

「やめてよ、トオルちゃん。オードリーと言えば、ヘプバーンに決まってるでしょ！」

「それで、ヘプバーンがどうしたんです？」

「彼女は正統派の美人じゃないし、セクシー女優でもない。エラが張った顔だし、首も長すぎるわ。欠点だらけなのは、あたしと同じ」

「所長の場合、欠点というほど生易しいもんじゃないと思いますけどね」

「それでもオードリーは自分の欠点を上手に生かして『ローマの休日』で大スターになったの。あたしも見習わなきゃ、という話よ」

「何がローマの休日ですか。`トンマの休日、みたいな顔して」

「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山とイケメン調査員の透が夜の片町で聞き込み中だ。金沢市に住むパートタイマーの直子(48歳)から「一人娘が孫を残して男と駆け落ちした。居場所を探してほしい」と依頼を受け、娘の志帆(22歳)がキャバクラ嬢として働いていた片町にやって来たのだ。この日の市山はファーコートの下にスリットの深いロングドレスを身にまとい、「夜の蝶」をイメージした女装をしている。キャバ嬢相手に聞き込みをする際、同業者だと思われた方が好都合という配慮らしいが、市山は「夜の蝶」というよりも「夜の毒蛾」のように見えた。

志帆は金沢市内の高校を1年で中退後、17歳でできちゃった結婚。しかし、菜摘(4歳)を出産してほどなく離婚し、いくつか仕事を転々としたのち、水商売の世界に入った。店に出ている間、菜摘の面倒を実家の直子に託していたものの、半年前、「友達に会いに行く」というメールを寄越して姿を消して以来、音信不通の状態が続いていた。母子のアパートからは洋服や身の回り品も消えており、意図的な家出は明らかだった。

「幼い娘を残して家出するなんて母親失格ですよ、まったく」

透が口を尖らすと、市山が言った。

「母親だって人間。家出したくなる時もあるわ。けどね、母親が家出していいのは子どもが学校や幼稚園に行っている間だけ。子どもが家に帰ってきた時は笑顔で出迎えなきゃ。それが母親というものよ」

2

数日後、「金沢プライベート・リサーチ」に直子と菜摘がやってきた。歩くとキュッキュと音が出るサンダルを履いた菜摘は汚れたぬいぐるみを大事そうに胸に抱いている。

「お嬢ちゃん、お名前は？」

スーツ姿で、男、に戻った市山が尋ねると、緊張した面持ちの菜摘が「なっち。この子はマーちゃん」とぬいぐるみにお辞儀をさせた。

「それじゃ、なっちとマーちゃん、探偵のお兄ちゃんとお外に散歩に行こうか」

気を利かせた透が声をかけると、菜摘がうれしそうにうなずく。サンダルを鳴らしながら透と手をつないでオフィスを出て行く菜摘の後ろ姿を見送った市山が苦笑した。

「大概の女がイケメンのトオルちゃんを好きになるのよ。4歳の彼女も例外ではなかったようね」

直子は心労が重なったせいか、ひどく顔色が悪く、やつれているように見えた。

「それじゃ本題。娘さんが勤めていたキャバクラの同僚にいろいろ話を聞いて回ったけど、誰も彼女の行き先を知らなかった。最近、ゲームサイトで知り合った県外の男と仲良くしていたそうよ。県内にはもういないかもしれないわね」

直子が深いため息を吐いて、落胆した。

「こうなったら、あなたがなっちゃんを育てるしかないんじゃないかしら」

サラリーマンだった直子の夫、つまり志帆の父親は10年前に病気で亡くなり、直子は夫が残した保険金とパート収入でつましく暮らしている。持ち家の住宅ローンは完済しており、菜摘との生活は十分可能なはずだった。

「それができないんです」

直子がきっぱりと言った。

「どうして？ なっちゃんは血のつながった孫娘でしょ。あなたは40代で、まだ若い。もう一人、娘ができたと思って育てればいいじゃない」

「私はガンなんです。残された時間はもう、少ししかありません」

3

菜摘の父親は高校中退後に勤めたバイト先の社員だった。妊娠が発覚し、入籍だけ済ませて新婚生活を始めると、ダンナは夜泣きがなかなかやまない赤ん坊の菜摘に「しつけ」と称して暴力をふるうようになる。もとはといえばバイト先で知り合ったお手軽な関係だ。それほど愛着はなく、2年も経たないうちに離婚したけれど、ワンルームの賃貸で始めた母子家庭の生活は想像以上に苦しくてイライラが募り、気が付くと自分まで菜摘に手を上げていた。

高校中退では単純事務の派遣仕事さえ紹介してもらえない。ましてや娘が幼く、病気で休みがちなので、採用してくれるのはパートがせいぜい。月収は10万円足らずでしかなく、母子どころ自分一人でも生きていくのが厳しい。そこで菜摘を実家の母親に預け、水商売で働くことにした。

仕事を終えて深夜、実家に迎えに行くと、寝ずに起きていた菜摘が待ってましたとばかり、まわりつく。アパートに帰ってもずっと自分に話しかける菜摘がうっとうしくて仕方がない。

「あたしにばかり甘えないでよ！ あんたはあたしに甘えればいいけど、あたしは誰に甘えればいいの？ こっちは仕事で疲れてるのよ！」

薄汚れたぬいぐるみをいつも大事そうに抱える菜摘に無性に腹が立った。高価なおモチャを買ってやれない自分を無言のうちに非難しているのだ。もともと菜摘は望んで産んだ子どもではなかった。

まだ22歳だというのに、菜摘がいるせいであたしは幸せになれない。やりたいことがたくさんあるのに――そう考えると、わき上がる感情があつという間に沸点を超えた。衝動的に菜摘からぬいぐるみを取り上げ、アパートの窓外に投げ捨てた。ぬいぐるみを取りに外へ行こうとする菜摘にまた腹が立ち、手を上げる。何も別に好きこのんで怒っているわけじゃない。怒らせるようなことをする菜摘が悪いのだと自分に言い聞かす。

関西ににいるという、ゲームサイトで知り合った男に会いに行こうと思いついたのは、それから数日後のことだった。

4

直子は進行性のガンで、医師から一刻も早い入院を迫られていたが、菜摘を残して入院はできないと通院治療とパート勤務を続けていた。直子の父親はすでに亡く、認知症を発症している母親は高齢者施設に入所しており、菜摘を養育するどころではなかった。「金沢プライベート・リサーチ」のオフィスで、市山と直子が善後策の検討を続けている。

「ほかになっちゃんの面倒を見てくれそうな親族はいないの？」

「市内に親戚はいますが、もう何十年も年賀状のやりとりさえしていません」

「だとすればなっちゃんは児童養護施設で暮らすしか選択肢はないか……」

「施設に連れていかれたら、菜摘はよく知らない子どもや大人たちに囲まれて暮らすんでしょう？ そんな可哀想なことはできません！」

途中から鼻の詰まった声になった直子が目元にハンカチを当てた。

「施設って、あなたが思うほど悪いところじゃないわよ。少なくともなっちゃんを捨てて出て行った母親と暮らすより、よほど安全で平和よ」

「……」

「子どもは家庭だけで、ましてや母親だけで育てるものじゃない。世の中のみんなで育てればいいのよ」

翌日、直子は児童相談所に相談に赴く。市山が警察と家庭裁判所に母親による虐待を通報したこともあって調査と事務手続きは迅速に進められ、ほどなく菜摘は児童養護施設に入所、それを待って直子が病院に入院した。

5

その後も志帆の行方は杳として知れなかった。入院中の直子から「頼みがある」と市山に連絡があったのはクリスマスイブの朝である。病室を訪ねると、直子は枝のように細くなった腕に針を刺して点滴を受けていた。髪は真っ白になり、眼窩が落ちくぼんでほほはこけ、一気に何歳も

老け込んだように見える。

「菜摘にプレゼントをあげてください。来年のクリスマスには私はいないから……」

「分かったわ。あたしに任せて」

それから数時間後、ジングルベルの音楽が流れるショッピングモールをミニスカサンタの衣装をまとった市山とトナカイの着ぐるみ帽子を被った透が歩いている。菜摘へのプレゼントを買いに出かけたのだ。市山が進むたび、前方の人垣が真っ二つに分かれていく。「旧約聖書」の世界なら、市山はまさにモーゼだった。透が叫んだ。

「どうして普通にサンタクロースの格好ができないんですか！ まつげエクステで盛り盛り女装したサンタなんて変でしょうが！」

「別にオネエのサンタがいたっていいじゃない」

「本当にこの格好でなっちに会いに行くつもりですか」

「今夜は聖夜。きっと喜んでくれるわ」

「そうかなあ。所長はサンタというより、赤ずきんを食べようとおばあちゃんに変装したオオカミに見えるんですけど」

「病院の直子からプレゼントを託されてきた」と告げると、児童養護施設の担当者は市山たちの姿に度肝を抜かれながらも快く菜摘に会わせてくれた。事務所にやってきた菜摘が市山と透を見た瞬間、「探偵のおじちゃんとお兄ちゃん！」と目を輝かせる。

「おじちゃんじゃなくて、お姉ちゃんね」

市山がさりげなく訂正して続けた。

「なっちゃんのおばあちゃんからクリスマス・プレゼントよ。ぬいぐるみが古くなってたから、新しいのを持ってきたわ」

「メリークリスマス、なっち！」

しかし、市山と透がリボンをつけた大きな包みを差し出しても、菜摘は手を出そうとはしなかった。両手にはいつものぬいぐるみが抱かれている。

「マーちゃんはママが買ってくれた菜摘の宝物。だから、新しいのはいらないの」

菜摘の目に涙が浮かんでいる。いまにもこぼれ落ちそうだ。

「ねえ、もしかしてマーちゃんってママのこと？」

「そうだよ」

菜摘は志帆が仕事で不在の間、ぬいぐるみのマーちゃんを母親代わりにしていつも一緒に遊んでいたのだろう、と市山は思った。

「そんなことも分からないなんて、あたしはやっぱ、トンマね。サンタならなっちゃんのママをここに連れて来たはずなのに。誰もあなたの気持ちを聞かなくてごめん」

「探偵さんにお願ひがあるの……ママに伝えて。なっち、ママのこと待ってるから早く迎えに来て、って」

そう言った瞬間、菜摘の目から涙があふれ、ほほを伝った。「ママに会いたい！ おばあちゃんに会いたい！ おうちに帰りたいよう！」と菜摘が小さな体を震わせ、しゃくり上げて訴える。言葉を失った市山と透は立ち尽くすしかない。